

# 六〇会

平成17(2005)年、刃法寺町の60歳以上の有志8人が、排水処理場周辺に広がる耕作放棄地を整地し始めました。有志は、まちおこし団体「六〇会」を結成し、ここを住民憩いの公園にしようと奮闘します。東屋や橋などを設置したほか、ハスやアジサイを植栽。明治時代の字名にちなんで「穴虫の郷」と名付けられた公園には、四季折々の花々が咲き、地域の人々が集います。

結成当初8人だった「六〇会」は、その後賛同者が増え、現在は23人に。毎月1日には「穴虫の郷」の草刈り作業などを行っています。今回は、休憩中の皆さんにお話を伺い、会長の笠井 年憲さん(としのり)に代表して答えてもらいました。

「穴虫の郷」には、本格的な東屋や橋などが揃っていますが、これらは皆さんの手作りですか？

笠井：そうです。ここにあるものは、皆で協力して作ったものばかりです。会員の中には設計・施工・電気・動力機械などの技術や資格を持っている人がいて、それぞれの能力を活かしあいながら進めました。道具も自分たちで用意し、た

たとえば東屋の場合、山から伐り出した木材や間伐材を使って、完成までには半年かかっています。入口の招き猫も一刀彫が趣味の会員が制作したものです。



「穴虫の郷」入口の招き猫

「それはすごいですね。地域に貢献したいという、皆さんの気持が伝わります。ハスやアジサイを植えたのも、同じ気持ちからなのです。」

笠井：地域の皆に楽しんでもらいたく、始めましたが、ハスの花は育てるのが意外と大変で、冬期には愛知県愛西市の

観光協会の指導を受けながら、ようやくここまで増えました。今では、7月に「花蓮祭り」を開催(中止の場合あり)し、参加者にかき氷や流しそうめんなどをふるまっています。最近では県外からの訪問者もいて、600人ほどが集まります。また、春にはサクラ、初夏にはアジサイ、秋にはフジバカマも花盛りとなります。フジバカマは昨年5月に植え始めたばかりですが、花の咲く10月には、合計400頭のアサギマダラが飛来してくれました。



アサギマダラ

いですね。大人だけでなく、子どもたちも喜んでくれそうですね。

笠井：私たちは、会の結成当初から、地域の3世代が交流することを目的にしていきましたが、中でも子どもたちが自然や文化に触れる機会を増やすことを考えてきました。近くの水田を借りて稲作を始めたのも、子どもたちに田植えや稲刈り、はさ掛けなどを体験してもらうためです。また、地域に古くから伝わる「亥の子祭り」の継承もその一環です。「亥の子祭り」とは、どのような祭りですか？

笠井：旧暦10月15日の夜に1年の豊作を感謝するために行う祭りです。各家の玄関先を子どもたちが訪問して、亥の子と呼ばれる藁束を地面に打ち付けながら唄をうたうというものです。お菓子などのご褒美もあり、子どもたちも楽しそうに参加してくれます。祭りの少し前には、地域の3世代が集って、子どもたちの亥の子作りをサポートします。私たちは、子どもたちの成長につながるように、なるべく自主性を尊重するようにしています。

お話を聞いて、皆さんの子どもたちに対する愛情の深さが実感できました。ほぼ全員が「亥の子保存会」(川戸 孝夫会長)会員でもあることから、「亥の子祭り」の唄も教えてもらいました。「亥の子 亥の子 亥の子の藁は新藁で 新藁 新鮮 祝いましょ...(後略)」

インタビュー…中村真由美



「穴虫の郷」



大輪の花を咲かせるハス※



「花蓮祭り」の様子※



亥の子を手に、唄をうたう子どもたち※



「六〇会」の皆さん

※印の写真は取材先から提供していただきました